

Item	Information
Journal Title	Asian Research Journal of Japanese Studies & Japanese Language Education
Japanese Title	『アジアにおける日本研究・日本語教育学』
Issue	Vol. 1, No. 1
Publication Date	31 May 2026
Article Title	<p>学生の総合的コミュニケーション能力を育むことを目指す教育実践  —SWOT分析による発表活動を導入した専門日本語授業の試み—  Developing Integrated Communication Skills through SWOT Analysis-Based  Presentations: A Case Study in Japanese Language Education</p>
Author	Pham Thi Hong
Pages	pp. 1-14
ISSN	ISSN: 2760-5795 (Online, provisional)
Website	<a href="https://asianjsjle.org/">https://asianjsjle.org/</a>

学生の総合的コミュニケーション能力を育むことを目指す教育実践  
—SWOT分析による発表活動を導入した専門日本語授業の試み—

**Developing Integrated Communication Skills through SWOT Analysis-Based Presentations:  
A Case Study in Japanese Language Education**

Pham Thi Hong (ファム・ティ・ホン)

ベトナム国家大学ハノイ校 日越大学

## 要旨

現在、ベトナムにおける日本語学習者数は世界第6位に達しており、ベトナム政府はグローバル化および科学技術革命の時代において、日本語をベトナム人労働者の競争優位性の一つとして位置づけている。しかし、ベトナムにおける日本語教育は依然として試験対策に偏重しており、学生の言語運用能力の向上が大きな課題となっている。本研究の目的は、ビジネスや個人のキャリア設計などで広く使われているSWOT分析による発表活動を導入した専門日本語授業の試みを学生の視点から考察することにより、ベトナム人学生は21世紀型スキルとしての総合的コミュニケーション能力をどのように捉えているのかを明らかにすることである。本研究は中上級レベルのベトナム人学生を対象とし、質問紙によるアンケート調査及び学習のプロセス評価を通じて学生の反応を調査した実践報告である。調査の結果、今後総合的コミュニケーション能力を高めるために学生の課題が明らかになった。

## キーワード

日本語教育、専門日本語授業、コミュニケーション能力、ベトナム人学生、中上級レベル

## Abstract

Currently, the number of Japanese language learners in Vietnam ranks sixth in the world. The Vietnamese government positions Japanese language proficiency as a key competitive advantage for Vietnamese human resources in the era of globalization and the technological revolution. However, Japanese language education in Vietnam remains heavily focused on exam preparation, leaving the improvement of students' practical language proficiency as a significant challenge. The purpose of this study is to clarify how Vietnamese students perceive integrated communicative competence as a 21st-century skill. This is achieved by examining, from the students' perspective, an instructional trial in a specialized Japanese language class that incorporated presentation activities based on SWOT analysis, a framework extensively utilized in business and personal career design. This study is a case study

conducted for upper-intermediate and advanced Vietnamese students, investigated through a questionnaire-based survey. The results of the study identified specific challenges that students must address to further enhance their integrated communicative competence in the future.

### **Keywords**

*Japanese Language Education, Specialized Japanese Language Class, Communication Skills, Vietnamese students, Intermediate-advanced level*

### **著者紹介**

#### **Pham Thi Hong (ファム・ティ・ホン)**

ベトナム国家大学ハノイ校日越大学 (VJU) 日本語講師。現在は同大学大学院日本学プログラム博士課程 1 年次に在籍中。専門分野は、漢越語、日本語教育学、アクティブ・ラーニング、および批判的思考 (クリティカル・シンキング)。主な研究関心は、ベトナム人学習者を対象とした効果的な教授法の開発にある。

連絡先: [hongpham081j4pdo@gmail.com](mailto:hongpham081j4pdo@gmail.com)

#### **About the Author**

Pham Thi Hong is a Japanese language lecturer at Vietnam Japan University (VJU), Vietnam National University, Hanoi. She is currently a first-year doctoral student in the Graduate Program in Japanese Studies at the same university. Her areas of specialization include Sino-Vietnamese vocabulary, Japanese language education, active learning, and critical thinking. Her main research interest lies in the development of effective teaching methods for Vietnamese learners of Japanese.

Contact: [hongpham081j4pdo@gmail.com](mailto:hongpham081j4pdo@gmail.com)

## **1. 背景**

近年、ベトナムにおける日系企業の数 は年々増加傾向にある。日本貿易振興機構 (JETRO) が 2022 年に実施した調査によれば、ベトナムに進出している日系企業は 2000 社を超え、その半数以上が今後の事業拡大を計画しているという。そのため、日系企業における人材需要の増加につれ、日本語学生にとっての雇用機会も数多くなっているとされている。

現在のベトナムにおいては、英語だけではなく、他の言語教育も必要だという意見が多く、日本語教育が非常に盛んでいることが事実である。ベトナムの教育訓練省によると、日本語は、日本政府との枠組み合意に基づき 2025 年から 2034 年にかけて全国の小学 3 年生から高校 3 年生を対象に第一外国語の必須科目もしくは選択科目として導入されるという。ま

た、2021年の国際交流基金の調査によると、ベトナムの日本語学習者数は世界第6位（169,582人）に達し、その中でも民間の教育機関でない学校教育機関数や学習者数の増加や、文系のみならず工学・看護・観光などの高等教育分野の拡大などが著しいとされている。

しかしながら、ベトナムの日本語教育は、量的に広がっている一方で、教育の質的側面における課題が見られる。Le（2017）は、学習者中心や言語運用能力の育成などの現代的な教育観は一部導入されているものの、実際には依然として教師中心・試験対策重視の教育が支配的であると指摘している。また、日本語教育の現場では日本語能力試験（JLPT）合格者数が教育成果の指標とされやすく、学習者の実用的な言語運用能力が弱いというのが現実であるという（Than, 2022）。その結果、授業で形式的なプレゼンテーションの SCRIPT を暗記し、自分の言葉で自分の意見を表すことができていない学生もいる。つまり、学生の総合的コミュニケーション能力が不十分である現状が見られる。

## 2. 先行研究

### 2.1 SWOT 分析の先行研究

SWOT 分析とは、スタンフォード研究所の Albert Humphrey が提唱した組織やプロジェクトの内部環境と外部環境を評価するための戦略的フレームワークである（中川, 2024）。この分析は、組織内部の優位な点である強み（Strengths）、内部の改善を要する弱み（Weaknesses）、外部環境の有利な状況に関する機会（Opportunities）、外部環境から生じる潜在的なリスクや課題といった脅威（Threats）の4つの要素を特定することである。

SWOT 分析の起源を巡っては、Benzaghta（2021）によれば、同分析は1960年代に Albert Humphrey が主導した研究プロジェクトは、米国のフォーチュン500に選出された主要企業を対象に、経営計画における問題点を解明し、新たな管理システムを構築することを目的に実施されたものであるという。その後、1990年代以降は戦略経営の領域において支配的なフレームワークとして広く使われるようになってきた。近年、教育分野においては、高等教育機関の経営・評価というマクロな視点に留まらず、教室実践における能動的学習ツールとしても応用されるようになった（Benzaghta, 2021）。

日本語教育においては、先行研究を考察した結果、SWOT分析が教室実践に使われるツールとしては主な二つの活用動向が見られる。第一の動向は、SWOT分析を自己分析および将来のキャリアデザインのための思考枠組みとして活用するものである（佐古 恵里香・山内 信幸, 2023）。具体的には、学習者は自身の能力・性格・弱点といった内部要因を整理し、労働市場の動向といった外部要因と照合した上で自己を客観的に評価し、自身の強みや弱みを明確に認識するのみならず、将来のキャリアパスを構築することもできる。第二の動向は、

ビジネス日本語教育において SWOT 分析を学習活動として組み込む試みである（藤彩・金孝卿, 2012）。佐古 恵里香・山内 信幸（2023）によると、新出語彙を応用し、SWOT 分析を用いたプレゼンテーションを実践する活動に対する学生の強い興味・関心が示されているという。

以上の先行研究から、SWOT 分析はビジネス日本語教育における動機付けの促進および学習者の自己分析の向上において有効な能動的学習ツールとして使われていることが明らかになった。しかし、ベトナム人学生を対象に総合的コミュニケーション能力を育成することを旨とする学習活動として SWOT 分析を活用する研究は、まだ限定されている。

## 2.2 総合的コミュニケーション能力について

當作 (2013) は、グローバル化や情報社会による変革する時代に適応可能な人材を育成するための外国語教育の「ソーシャル・ネットワーク・アプローチ」（以下は SNA）として総合的コミュニケーション能力という概念を提唱している。同研究では、従来の外国語教育アプローチが主に聞く、話す、読む、書くという 4 つのスキルを磨くのに焦点を当てており、21 世紀における適応性の高い学生の育成という側面には十分な注意が払われていないと指摘されている。これに基づき、総合的なコミュニケーション能力の獲得が言語学習の学習目標として主張されている。當作 (2013) の研究では、総合的なコミュニケーション能力において、要素「つながり」が非常に重要であると提唱されている。同氏によれば、言語学習は単に流暢に話す能力の獲得にとどまるべきではなく、学習者がその言語を用いて社会的なつながりに参画し、共通の課題を解決していくプロセスこそが肝要であるとされる。

當作の研究では、学習者が総合的なコミュニケーション能力を身につけるという目標を達成するため、「3×3+3」という公式が提唱されている。この公式は、合計 12 の学習目標から構成され、「言語」「文化」「社会」という 3 つの領域、「わかる」「できる」「つながる」という 3 つの能力、そして関連する 3 つの要素を含んでいる。その具体的内容は、以下の図 1 に示す通りである。

	言語領域	文化領域	グローバル社会領域
わかる	自他の言語がわかる	自他の文化がわかる	グローバル社会の特徴や課題がわかる
できる	学習対象言語を運用できる	多様な文化を運用できる	21世紀のスキルを運用できる
つながる	学習対象言語を使って、他者につながる	多様な文化的背景を持った人につながる	グローバル社会とつながり、社会に貢献する

+

学習者の関心、意欲、態度、学習スタイル	他教科の内容、既習知識	クラス外の人、モノ、情報
---------------------	-------------	--------------

図1 総合的コミュニケーション能力 (3×3+3)

(當作 (2013) による)

ベトナムの日本語教育においては、Le (2017) は、SNA に基づいた総合的なコミュニケーション能力の育成が、21世紀型スキルの習得を目指すベトナムの大学における効果的な教育改革の目標であることを指摘している。したがって、ベトナム人学生に総合的コミュニケーション能力を育成することが急務になっているのではないかと思われる。

### 3. 研究目的

本研究は、SWOT分析による発表活動を導入した専門日本語授業の実践例をベトナム人学生の視点から考察することにより、ベトナム人学生は21世紀型スキルとしての総合的コミュニケーション能力をどのように捉えているのかを明らかにし、今後のよりよい総合的コミュニケーションの授業づくりのための学生の意識について基礎情報を提供したい。

### 4. 研究対象及び研究方法

まず、本研究は、ベトナムのハノイにあるA大学(以下、A大学)の4年生34名を対象とし、日本語能力試験(JLPT)N3レベル相当以上の中上級日本語学生向けに、学生がSWOT分析に基づいて行う発表活動(以下、SWOT発表活動)を設計・実施する。

次に、研究方法としては、當作(2013)が提唱した3×3の学習目標に基づき、SWOT発表活動において学生が達成すべき目標を設定する。その後、アンケート調査を通して発表活動の目標達成度に関する学生のフィードバックを収集し、考察する(1)。さらに、「當作(2013)が提唱した「+3」の学習目標に関し、活動全体にわたる学生のフィードバックを収集し、考察する(2)。(1)と(2)の結果から学生が自分の総合的なコミュニケーション能力をどのように捉えているのかを全体的に考察する。

## 5. SWOT 発表活動について

### 5.1 SWOT 発表活動の実施について

SWOT 発表活動は、日本学専攻の 4 年生 34 名を対象とした専門日本語科目の一環として実施された。A 大学では、リベラルアーツ教育の理念に基づき、日本学専攻の学生は経済、日本語教育及び法律を含む 3 つの専門分野に分かれて教育を受けている。本研究の対象クラスは、主に経済を専攻する学生で構成されていた。SWOT 分析は学習モチベーションを高め、教室で学ぶ日本語と、将来の仕事に近い実践的な日本語を連結させる機会を学生に与えることを目的に導入された。近藤（2014）は、日本語は、仕事の手段、協働の手段、人間関係構築の手段であり、キャリアで必要な道具であると述べている。

本活動の総時間は 50 分を 1 回とする合計 4 回分であり、2 週間にわたって実施された。この活動は、具体的に以下の通りである。

表 1 SWOT 発表活動の流れ

一回目	<ul style="list-style-type: none"><li>・グループ分け</li><li>・SWOT 分析について紹介した読み物をグループで読み、SWOT 分析の 4 つの要素を理解</li><li>・SWOT に基づいてビンファスト（ベトナムの大手自動車企業）のことを調べ、他のグループと共有</li><li>・ビンファストのマーケティング戦略/経営戦略の立案</li></ul>
二回目	<ul style="list-style-type: none"><li>・立案したマーケティング戦略/経営戦略の実現可能性をグループで相談し、見直す</li><li>・決めたマーケティング戦略/経営戦略についての発表スクリプト及び PPT の作成</li></ul>
三回目	<ul style="list-style-type: none"><li>・教師から受けたフィードバックに基づいてスクリプト及び PPT を修正</li><li>・発表準備</li></ul>
四回目	<ul style="list-style-type: none"><li>・各グループの発表</li><li>・教師からの FB 及びポートフォリオの記入</li></ul>

### 5.2 SWOT 発表活動の目標設定

當作（2013）の提唱した「3×3」に基づき、学生が目指す SWOT 発表活動の目標を以下の表 2 のように設定した。

- ・ 言語領域：聞き手のことを考慮しながら発表できることを目標とする。

- ・ 文化領域：国内外の文化を考慮しながらふさわしいマーケティング戦略/経営戦略を取り上げること目標とする。
- ・ グローバル社会領域：持続可能な社会のために行動する意識を育成すること目標とする。

表2 学生がSWOT発表活動において目指す目標

言語領域	わかる	日本語の発表表現や、経済に関するよく使われる専門用語が分かる
	できる	適切な表現や専門用語を利用して発表の SCRIPT 及び PPT を作成することができる
	つながる	聞き手にとって視覚的に明瞭かつ簡潔な構成の PPT を作成することができる。また、口語体の表現および分かりやすい言葉を工夫した SCRIPT を書くことができる。
文化領域	わかる	ベトナム人消費者の行為が分かる
	できる	消費者の行為に関するベトナム文化と日本文化の主な違いを取り上げることができる
	つながる	海外市場において Vinfast のチャレンジ <sup>1</sup> とつながることができる
グローバル社会領域	わかる	持続可能な開発の重要性が分かる
	できる	21 型スキルを活用することができる
	つながる	持続可能な開発のための社会において自分自身とつながることができる

## 6. 調査の結果

### 6.1. 「3×3」に関する学生のフィードバックの調査結果

<sup>1</sup> VinFast は、2017 年に設立されたベトナム最大の民間グループ「Vingroup」傘下の自動車メーカーである。ここにおける「VinFast Challenge」という表現は、同社が国際舞台において「グローバルなブランドイメージの構築」と「海外市場への進出・車両販売」を同時に推し進める取り組みを指す。

発表後、学生が以上の表2における発表目標を達成できたのか、言語領域、文化領域とグローバル社会領域のそれぞれに関して自分のできたこと、および直面した課題について自己評価をするためのアンケート調査を行った。「自分のできたこと」及び「直面した課題」に関し集まったデータは、筆者が重なっている学生の回答を要約してきた。具体的な結果は、回答率が94%（32人）で以下の表3にまとめている。

表3 学生のフィードバックの調査結果

学生が目指す目標		目標達成の割合	学生ができたこと	課題
言語領域	わかる	日本語の発表表現や、経済に関するよく使われる専門用語が分かる	91% (29人/32人)	<ul style="list-style-type: none"> <li>発表表現の使い方</li> <li>スクリプトにあまり依存しないで発表できること</li> <li>聞き手とインターアクションしながら発表できること</li> <li>理解しやすい内容の展開方法</li> <li>聞き手のことを考慮して難しい言葉を使わないようになったこと</li> <li>明確に大きな声で発表すること</li> </ul>
	できる	適切な表現や専門用語を利用して発表のスクリプト及びPPTを作成することができる	91% (29人/32人)	
	つながる	聞き手にとって視覚的に明瞭かつ簡潔な構成のPPTを作ることができる。また、口語体の表現および分かりやすい言葉を工夫したスクリプトを書くことができる	75% (24人/32人)	
文化領域	わかる	ベトナム人消費者の行為が分かる。	59% (19人/32人)	<ul style="list-style-type: none"> <li>多様な文化の消費者から考えて立案できていない</li> <li>現地の文化を考慮したマーケティング</li> </ul>
	できる	消費者の行為に関するベトナム文化と日本文	38% (12人/32人)	

		化の主な違いを取り上げることができる			グ戦略のアイデアを出すのが困難
	つながる	海外市場において Vinfast のチャレンジとつながることができる	25% (8人/32人)		•国内外の市場の比較があまりできていない
グローバル社会領域	わかる	持続可能な開発の重要性が分かる	100% (32人/32人)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 持続可能な開発に向けた会社・人・社会の関係が分かること</li> <li>• グループワークのスキルや問題解決思考、ロジックな考え方を学んだこと</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 自分の根拠を強調するために例や引用を使用できる</li> <li>• 他のメンバーとのグループワークがうまくできていない</li> <li>• 自分の言いたいことがうまく伝ええない</li> <li>• 持続可能な社会における自分の行動がまだ積極的ではない</li> </ul>
	できる	21型スキルを活用することができる	63% (20人/32人)		
	つながる	持続可能な開発のための社会において自分自身とつながることができる	78% (25人/32人)		

表3に示されるように、言語領域においては、ほとんどの学生がスクリプト作成およびプレゼンテーションにおける日本語の活用という目標を学生全体の90%以上の高い割合で達成していることが分かる。さらに、多くの学生が、聞き手向けの効果的な語彙や表現を調整する意識を示した。一方で、専門用語や文型の不足といった課題も示されている。この課題は、教師が専門用語リストや基本的な文型パターンを提供することで、学生への支援を強化することにより解決可能であると思われる。

次に、文化領域に着目すると、学生は周囲の人の消費行為に関する文化的要因や現象を列挙することができた。しかし、レベル「できる」及び「つながる」の割合はそれぞれ38%と25%に留まっており、言語領域の割合と比較すると著しく低い。このことから多様な文化を運用する意識がまだ限定されていることが分かる。つまり、多様な文化を活用して問題解決をする意識はまだ限定的であると言えるだろう。この結果から、現在の社会背景において、

専門日本語授業における多文化理解及び、問題解決のために多様な文化を運用することの重要性が明らかになった。

最後に、グローバル社会領域に関し、学生全体の 100%がグローバル社会における持続可能な開発の重要性を認識している。加えて、学生は持続可能な開発目標のために自身の行動を社会と結びつける意識を示した。しかし、レベル「できる」の達成度が 63%に留まっていることから、学生がチームワーク能力や思考力といった 21 世紀型スキルを理解しているものの、それらを実践的な問題解決に応用することに困難を抱えていることが明らかになった。この事実は、学生の 21 世紀型スキル育成をさらに推進する活動の必要性を示している。

## 6.2 「+3」に関する学生のフィードバックの調査結果

當作(2013)は、「言語領域」「文化領域」「グローバル社会領域」という 3つの側面で構成される目標に加え、「+3」の各要素も強調している。當作が提示したこの「+3」の各要素に関し、ポートフォリオによる学生のフィードバックを収集し、同じ内容を持っている学生のフィードバックをカテゴリー化し、以下の表 4 の各項目に一覧にした。

表 4 「+3」に関する学生のフィードバックの調査結果

「+3」	学生がよくできたこと	課題
学生の関心、意欲、態度、学習スタイル	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 自信を持つこと</li> <li>• 緊張しないで発表中に落ち着くこと</li> <li>• アイコンタクトをキープできる・聞き手とのインターアクションの仕方</li> <li>• 時間を無駄にしなくなる</li> <li>• 面白い側面から情報を開拓すること</li> <li>• 発表を怖がらなくなる</li> <li>• 準備のために積極的にすること</li> <li>• 発表のテーマが実用かつ面白く感じる</li> <li>こと</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 発表の練習を十分に準備しない</li> <li>• 内容を見直す時間がない</li> <li>• 準備の時間がかかるため少し疲れる</li> <li>→授業の時間的プレッシャー</li> </ul>

他教科の内容、既習知識	<ul style="list-style-type: none"> <li>•見やすく科学的なスライドの作り方</li> <li>•新しい分野の知識を身につけること</li> <li>•SWOTの分析方法が分かるため面白いこと</li> <li>•各ブランドの戦略に興味を持つようになること</li> <li>•日本語の応用と生活とのつながりを感じる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>•SWOTのチャレンジの窓をよく理解しない</li> <li>•マーケティングや市場に関する経済の専門知識の不足</li> </ul>
クラス外の人、モノ、情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>•他の人の意見をよく傾けて内省する</li> <li>•他の人とのインターアクション、相互サポート</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>•アルバイトや授業でとても忙しいため打ち合わせ時間を調整して確保するのが難しい</li> <li>•オンラインでグループで相談したため、コミュニケーションがうまくない</li> </ul>

上記の表 4 より、SWOT 発表活動を通し、学生の関心、学習意欲、態度、および学習習慣の全てにおいて極めて積極的な反応が見られた。また、日本語を他教科や実際の生活に繋げることに関する学生の認識が出現したと言える。一方で、授業の時間的プレッシャーや、日本語授業の外における経済の専門知識や、クラス外のもの（アルバイトや、オンラインによるグループの打ち合わせなど）は課題となっていると考えられる。

### 6.3 小括

言語領域、文化領域及びグローバル社会領域を比較して考察した結果から、以下のことが分かる。

3つの領域の平均値の比較分析から、学生の総合的コミュニケーション能力が言語領域、グローバル社会領域、文化領域の順に減衰する傾向が見られる。具体的には、言語領域が最も高い割合（平均値 85.67%）を示しているのに対し、文化領域は最下位（平均値 40.67%）にとどまっており、領域間における能力の不均衡が顕著である。

「わかる」と「できる・つながる」のギャップについては、3つの領域のすべてにおいて、「わかる」の割合が常に最も高いか、それに準ずる高水準にある（言語：91%、文化：59%、グローバル社会：100%）。しかし、「できる」と「つながる」といった、より高次の資

質・能力へと移行するにつれ、その割合が段階的に低下する傾向が見られる。特に、文化領域における急激な割合の落ち込み（38%以下）と、グローバル社会領域における実践的スキル活用の「できる」段階での停滞（63%）は、理論的認識が実際の行動や社会的連動へと結びついていない認識と行動のギャップが見られる。

学習動機が高まったにも限らず、他教科やクラス外の人、モノと情報とのつながりも学生に認識されている。専門知識やグループディスカッションに使う時間に関する課題が残されている。

## 7. 結論

本研究では SWOT 分析を用いた発表活動を導入した専門日本語授業の実践例の考察を通し、ベトナム人学生の視点からすると、言語領域において、また、動機づけに関わる関心や態度、および他教科・教室外とのつながりにおいて、総合的なコミュニケーション能力は学生に肯定的に認識されていると言える。これらのことを踏まえ、今後のよりよい総合的コミュニケーション能力を育成する授業が期待されるであろう。しかし、高次の能力段階における実践的運用の度合いは依然として限定的であり、特に文化領域およびグローバル社会領域においてその傾向が顕著であるということが分かる。日本語教育においては、ベトナム人学生がこの課題を克服するために、知識の活用や社会とのつながりを促し、21 世紀型スキルの形成に寄与するような、高次の総合的コミュニケーション能力を育成することが不可欠であると考えられる。本研究では、調査対象が 32 人に限られるため、今後の課題としてこの調査結果をもとに、さらに対象人数を増やして、より明確な結果が出るように調査を続けたいと考える。

## 参考文献

1. 今田恵美・川瀬愛. (2025). 異文化間コミュニケーション能力を育てるための話し合いの試み：—異文化理解を深める話題展開の方法に注目して—. *日本語教育方法研究会誌*, 32(1), 52-53. [https://doi.org/10.19022/jlem.32.1\\_52](https://doi.org/10.19022/jlem.32.1_52) (2026年1月12日参照)
2. 近藤彩・金孝卿 (2012). グローバル時代における日本語教育:プロセスとケースで学ぶビジネスコミュニケーション. *NSJLE Proceedings 2012*, 103-116.
3. 近藤彩 (2014). キャリア・レディネスを促すビジネス日本語教育—インターンシップと国内就職を事例に—. *日本語教育*, 158, 15-30.

- [https://doi.org/10.20721/nihongokyoiku.158.0\\_15](https://doi.org/10.20721/nihongokyoiku.158.0_15) (2026年1月12日参照)
4. 佐古恵里香・山内信幸 (2024). 日本語学習者を対象とした自己紹介シートの作成 —オンラインツールの利用の試み—. 『国際言語文化学会 日本学研究』, 8, 61–74.
  5. 當作靖彦. (2013). 『NIPPON 3.0 の処方箋』. 講談社.
  6. 中川健太郎. (2024). 日本語教育における「批判的思考」の定義と実践：文献レビューを中心として. 『日本語教育方法研究会誌』, 31(1), 4-5. [https://doi.org/10.19022/jlem.31.1\\_4](https://doi.org/10.19022/jlem.31.1_4) (2025年12月1日参照)
  7. Than, T. M. B. (2019). ベトナムにおける日本語教育事情および日本留学の動向と課題. 『立教大学学術リポジトリ』, 107-130.
  8. Nguyen, S. L. A. (2015). 継続的なペア・フィードバック活動が学習者に与える影響—ベトナムにおける「即興スピーチ」指導を事例として—.
  9. Moriyama, S. (2024). 異文化間コミュニケーション能力をいかに育てるか：日本語教育における評価と実践の課題. 『日本語教育方法研究会誌』, 31(1), 2-3.  
[https://doi.org/10.19022/jlem.31.1\\_2](https://doi.org/10.19022/jlem.31.1_2) (2025年12月1日参照)
  10. Le, C. D. C. (2017). ベトナムの外国語教育政策と日本語教育の展開. 大阪大学学術情報庫.  
<https://doi.org/10.18910/67096> (2025年12月1日参照)
  11. Benzaghta, M. A., Elwalda, A., Mousa, M. M., Erkan, I., & Rahman, M. (2021). SWOT analysis applications: An integrative literature review. 『Journal of Global Business Insights』, 6(1), 55-73.
  12. Binkley, M., Erstad, O., Herman, J., Raizen, S., Ripley, M., & Rumble, M. (2012). Assessing 21st century skills: Summary of the ATC21S framework. In P. Griffin, B. McGaw, & E. Care (Eds.), 『Assessment and Teaching of 21st Century Skills』 (pp. 17-66). Springer.
  13. Japan Foundation. (2021). 『Survey report on Japanese-language education abroad 2021』.  
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey2021/all.pdf>
  14. Jetro. (2025). 『Basic statistics and situation regarding Vietnam』. Retrieved January 26, 2026, from [https://www.jetro.go.jp/world/asia/vn/basic\\_01.html](https://www.jetro.go.jp/world/asia/vn/basic_01.html)

## 付録 1

### 発表の自己評価

**質問：**自分の発表では、以下の表にある目標を達成したと思いますか。達成したと思ったら、目標のそれぞれに✓をつけてください。また、言語領域、文化領域とグローバル社会領域という3つの領域について、自分のできたこと及び課題も書いてください。

領域	達成した目標	自分ができたこと	自分の課題
言語 領域	□日本語の発表表現や、経済に関するよく使われる専門用語が分かる		
	□適切な表現や専門用語を利用して発表のスクリプト及びPPTを作成することができる		
	□聞き手にとって視覚的に明瞭かつ簡潔な構成のPPTを作ることができる。また、口語体の表現および分かりやすい言葉を工夫したスクリプトを書くことができる。		
文化 領域	□ベトナム人消費者の行為が分かる。		
	□消費者の行為に関するベトナム文化と日本文化の主な違いを取り上げることができる		
	□海外市場において Vinfast のチャレンジとつながることができる		
グロー ーバ ル社 会領 域	□持続可能な開発の重要性が分かる		
	□21型スキルを活用することができる		
	□持続可能な開発のための社会において自分自身とつながることができる		

## 付録2

発表活動の全4回を振り返って、以下の表に沿って、自分の感想を書きなさい。

「+3」	自分がよくできたこと	課題
自分の関心、意欲、態度、学習スタイル		
他教科の内容、既習知識		
クラス外の人、モノ、情報		